

まちづくり

Partnership 協働

～未来に受け継ぐ公園づくり～

彼岸花22,000苗 & ハナモモ140本を大池公園に

矢吹町区長会（大野康統会長）主催、矢吹町共催の「大池公園植栽・植樹事業～未来に受け継ぐ公園づくり～」が2月7日に開催されました。

町区長会は、百花繚乱、桃源郷と言われるような季節の花咲く「花の里やぶきづくり」を提唱しており、今回の事業は、「福島県まちづくり支援事業」を活用して行われたものです。

当日、大池公園に集まったのは町区長会をはじめ、ボランティアの皆さんなど約220人。植栽や植樹の方法について説明を受けた後、園内の各区域に分かれて作業を行いました。

青空の下、彼岸花22,000苗とハナモモ140本の植え付けを終えた参加者の皆さんは、トン汁を食べて作業で冷えた体を温めました。



作業開始前に植樹方法を実演



介護 認知症対応グループホーム
利用定員18名・全室個室

人のやさしさが宿る集いの場
医療法人栄心会 さかえ内科クリニック附属
さかえハートホーム矢吹
矢吹町小松222 ☎21-9556

●御祝・仏事等の返礼品ならシャディサラダ館矢吹店
●学校に必要な物なら[文具・学校指定用品・運動ジャージ]
●28年度矢吹中学校入学生生服早期予約受付中【特典あり】

ファミリータウン きたむら
矢吹町中町242 TEL 42-2277

ふとん・羽毛ふとんの仕立て直しセール中
ふとん仕立て直し掛数共1枚… ￥7,450
羽毛ふとん仕立て直し掛1枚… ￥21,000

私のひとこと



矢吹町長 野崎吉郎

矢吹の大勢の「ブッファイエ」たちに感謝

「作業終了」の声。やっと終わったか。久し振りの労働。額の汗と共に、腕や足腰の疲労と痛みが気持ちいい。短時間でよく植え終わったものだと感じ入る。大勢の力はこんなにも凄いものだ、あらためて思い知る。この事業の概要を区長会新年会の席で、大野康統会長から聞かされたときは正直焦った。不安が頭をよぎった。人が集まるだろう。か。やり終えるのだろうか。しかし、これらは杞憂と化した。彼岸花の球根22,000球、花桃の苗木が140本。200人を超すボランティアの「協働」の力は、これらの作業をたった2時間余りで全てやり終えたのである。近年、まちづくりは自分たちの手で、自分たちで出来ることは自分たちでやろうと、町民有志が集まり各地区で多くのボランティア団体が活動されていることはご案内の通り。こうした動きが加速されるなかで、

この事業は計画され実施された。矢吹を花いっぱいになりたい。矢吹の花の森構想をテーマに掲げ、去る2月7日、区長会主催の「（花の里やぶきづくり）大池公園植栽・植樹事業」は、かつてない規模で開催され大成功裏に終わったのである。

これには、背景がある。町の財政だ。町の予算は有限。9年前、はからずもそれは露呈した。公（町）の及ぶ力は財政的に限界があり、住民ニーズの全てに答えることが出来ないことは、今まで何度も話をさせて頂いてきた。公のあるべき姿を、そして活路をどこに、どんな形で見いだすのか。公の役割、民の役割をどうするのかの答えが、すなわち「協働」であり、住民参加、住民主導のまちづくりに行き着いたのである。協働のまちづくりと言っても、簡単に済む話ではない。暗中模索。現在も試行錯誤の真只中。しかし、光り輝く未来に輝きを増しつつある。これまでに例を見ない、今回の「協働」による花の森事業をやり終えて確信している。それと同時に、多くの町民の心の変化が大きく作用していることも見逃せない。全国各地でも、当町が参考とすべき、まちづくりの成功事例が数多く紹介されている。

私も先進的な実践活動を視察するため、数多くの場所を訪れた。そこで気付いたことがある。数ある成功事例には多くの要因があることを。自然、歴史、文化、芸術など。しかし、敢えて一つと問われれば、私はこう答える。それは「ヒト」である。訪問先では多くのボランティアの「ヒト」が、まちづくりのために知恵を出し、汗を流している。「ヒト」の熱意と力の結果は、これほどまでにまちの姿を変えられるものかと、つくづく思った。そして、必ずその集団の中に「キーパーソン」が居ることに気付いたのである。

「南フランスのプロバンスで、ブッファイエという男が荒地に、一人で黙々と木を植え続け、ついに広大な森にしてしまった『木を植えた男』という有名な話がある。かつての豊かな森を人間が壊した。そこでブッファイエは50歳を過ぎて、荒地地に木を植えることを決心する。一人黙々と木を植える。二つの大戦を超えて続けた結果、まるで自然の森ようになる。水の流れる復活し、一時は廃墟だった村も蘇り、人の笑いさざめく活気ある土地になる。蘇った村で、ブッファイエは87歳で安らかに息をひきとった。」と。これはフランスの有名（私はこの本を読んで初めて知った。）作家、ジャン・ジオノが「リーダーズ・ダイジェスト」誌に掲載した話である。

この話を町民の皆様に伝えようと書き綴って、ふと気付かされた。この話と同じように、私たちの町にも、身近な存在として「矢吹のブッファイエ」が居たことを。かつて、矢吹は水不足に悩む町であった。豊穡の大地を夢見、生涯を捧げた人間がこの矢吹の地にいたことに気付いたのである。「星吉右衛門翁」その人である。当時、誰もが考えつかない「西水東流」の建白書を明治政府に提出。日本三大開拓地と称される肥沃な大地に今を生きる私たちは、その功績を讃えずにはいられない。そして、星翁のDNAは、確実に私たち矢吹町民一人ひとりに等しく、確実に受け継がれているものと確信している。現在、そのDNAを見事に体現している多くの「矢吹のブッファイエ」が大勢いることも忘れてはならない。そんな「矢吹のブッファイエ」を紹介する。

行政区を引っ張る二区行政区も蘇り、人の笑いさざめく活気ある土地になる。蘇った村で、ブッファイエは87歳で安らかに息をひきとった。」と。これはフランスの有名（私はこの本を読んで初めて知った。）作家、ジャン・ジオノが「リーダーズ・ダイジェスト」誌に掲載した話である。

今回の行政区主体の「大池公園植栽・植樹事業」は、協働のまちづくりを標榜する矢吹町の新たにして大きな足跡を刻む出来事となった。まちづくりにかける思いは様々であるが、その原点は「まち」を愛する心であると思う。まちづくりを楽しむながら、人と人の出会いがあり、まちを元気づけることにつながり、携わる人々の人生を豊かなものにする。今回のイベントの参加者の心の中をのぞくことはできないが、きっと、こんなことを考えていたに違いない。

「今やらずして誰がやるのか。我やらずして誰がやるのか。」未来との対話でもある協働のまちづくり。自然豊かなこの町の発展を信じ、そして次の世代へ繋げていくという大きな役割を私たちが担っていることをもう一度確認し、そして忘れてはならない。